二次元ぷち文庫
魔王エリシス
上田ながの
表紙イラスト：舞猫ルル
試し読み版
Kuma

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『魔王エリシス』に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

魔王
エリシス
上田ながの
表紙／舞猫ルル
二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

エリシス

漆黒のドレスをまとうブロンドの少女。父の教えを守って、魔物たちを統率する誇り高き魔王。

カシウス

魔王城に攻め込んだ人間。人々には勇者と呼ばれているが、その正体は私欲にまみれた男。

「また人間が攻めてきただと？」

部下の報告に魔城の玉座の主である一人の少女が眉を顰めた。

背中まで届く金色の髪に、猫のように釣り上がった瞳を持つ少女。真っ直ぐ伸びる鼻筋に、得意気に引き結ばれた唇はまるで人形のように整っている。細身の身体に身につけられるのは漆黒のドレスに黒いマント。悲しいほどに胸元のボリュームはないけれど、引き締まった腰と相まってスタイルはいいといえるだろう。

小柄な身体に生意気そうな表情――十代半ばの見た目と相まって、思わず抱きしめたくなるような小動物のようにも見えた。が、実際にそれを行動に移す人間はいない。何故ならばこの少女は人ではないからだ。

その額から、一本の角が伸びている。まるで一角獣のように雄々しく、気高い角。それこそが彼女が人ではなく、魔族であるという証だった。

そう、彼女こそが人を超える存在。魔族の中の魔族――第四代魔王エリシス＝サタナ＝レギリウスなのである。

「はい……連中も懲りないようでして……如何しましょうかお嬢」

部下のサキュバスが肢体をくねらせながら本当に困ったような表情を浮かべた。豊満な胸元がキュッと締まり、谷間が強調される。それをちらりと視界の端に捉えただけで、ヒクッと魔王の頬が引き攣った。

（そ……それは嫌がらせのつもりか？）

喉までそんな言葉が出かかる。とはいえ、王たるものが一々そんな瑣末なことを気にすることなどあってはならない。フウッと一度大きく息を吸い、心を落ち着かせると、エリシスは口元を引き締めた。

「……決まっているだろ。余の居城に攻め寄せてくる愚か者など、一度痛い目に遭わせてやればいい。二度と同じことをせぬように、圧倒的な力の差を見せつけてな」

威厳を持たせる為に、少女は胸を張ってみせる。しかし、角がある以外ただの女の子にしか見えないものがやっても滑稽なだけだった。というよりも妙に可愛らしい。実際サキュバスも少女の姿に「ええもの見たわ～」といったような表情を浮かべた。

「――って、確かにお嬢のいうとおりですが……」

が、すぐに部下は表情を引き締めると、詳しい説明を始めた。

彼女が言うには攻め寄せてきた人間の実力は魔族のそれを超えているらしい。人数は全部で四人らしく、連携を取りながら次々とこちら側の者を打ち倒していっているということだった。死者こそ出ていないが、このまま放置していればいずれ出てしまってもおかしくはないらしい。

この説明にフンッとエリシスは鼻を鳴らす。

「まったく情けない。魔族が人に敗れるなど……恥ずかしいとは思わんか？」

「申し訳ありません」
不機嫌になった少女の様子に、シュンッと部下が肩を落とす。そんな姿に、魔王はより怒りのボルテージを上げた。
口でこそ魔族の不甲斐なさを罵ったが、内心では部下達が倒されたことに怒っている。
（己よくも余の家臣達を……許さんぞ）
部下達の前では尊大に振舞うけれど、実際は何よりも彼らのことを大切に思っていた。
「……分かった。では余が出る。愚かな人間に魔族の恐ろしさを思い知らせてくれるわ！」
だからこそエリシスは自分の父であり、先代の魔王が残した遺産である錫杖を持って立ち上がる。その全身からは凄まじいまでの魔力が立ち昇っていた。
「き、気をつけてくださいお嬢」
サキュバスも戦いに赴こうとする主をやめようとはしない。それどころか積極的に応援をする。それは彼女も魔王の力を知っているからだ。一見すると少女でしかないけれど、エリシスは人を超える力を持つ魔族の王なのである。
そんな家臣に魔王は得意気に笑うが、
「ああ、まあ待ってろ。すぐに終わらせてくる……と、それと、いい加減余のことをお嬢と呼ぶのはやめよ。父上亡き今、余こそが魔王なのだからな」

そういうエリシスの頬は、心なし恥ずかしそうに赤く染まっていた。

※

人と魔族は別段争っているわけではない。勿論、過去の魔王の中には人に対して攻撃を仕掛けたものもいたが、先代、当代魔王は人間に対して特段の敵意は持っていなかった。部下達にも人を襲うなと命令しているくらいである。

ただ、人間達はそんな魔族の方針など知る術もない。自分達を超える存在に恐怖し、時折今回のように魔城へと攻め込んだりしてきていた。人に対して不干渉を旨としているエリシスも、流石に攻め寄せてくる者達には優しくはない。ただ、それでも命まで取るようなことはしなかった。

魔族の恐ろしさを分からせ、二度と手は出すまいと思わせさえすればいいのである。

今回の敵に対してもエリシスはそのつもりで挑んだ。

「お前が魔王か？　話に聞いてはいたが、想像していたよりも随分可愛らしいな」

攻め寄せてきた人間の名はカシウス。人の間では勇者とまで呼ばれる存在である。年齢は二十歳前後くらいだろうか？　自信満々の表情を浮かべている。実力に裏づけされた自信という奴だろう。実際彼と彼の仲間二人の周辺には、やられた魔族達が呻き声を上げながら転がっていた。彼は倒した魔族の頭を足で踏んでいる。

この光景にエリシスはギリッと奥歯を噛む。許せるものではない。

「よっぽど死にたいらしいな人間。余の部下達を痛めつけてくれた借りを返してやらねばならんな……」

空気さえも重くなっていくような圧倒的殺気が、少女を中心に辺り一帯に広がっていく。幼い身体つきからは想像もできないほどの魔力量。立ち昇る気迫に、城内がドス黒く染まっていくようにすら感じられた。普通の人間であれば、これだけで行動不能になってしまうだろう。実際、カシウスの仲間達二人はその場にへたり込み、動かなくなってしまった。

これには一瞬カシウスも驚いたような表情を浮かべたが「へえっ。やるねぇ」とすぐに余裕の表情を浮かべると、何の躊躇もなくエリシスに斬りかかってきた。

確かにその動きは常人のそれと比べて遥かに素早い。並みの魔族でも捉えられないほどのスピードである。

（なるほど。わざわざここへ攻めてくるだけのことはある。だが……）

エリシスは右手に錫杖を持ったまま、左手を突っ込んでくるカシウスに向けた。

ギュブアッ！　ドンッ！

瞬間、少女の前に巨大な魔力障壁が出現する。突っ込んできた人間はこれに激突し、次の刹那には爆音のようなものを轟かせて吹き飛んでいく。突進の勢いそのままに床を何度もバウンドし、遂には壁に激突した。

「……残念だったな人間。その程度の力では余に触れることもできんぞ」

首を傾げて馬鹿にするような質問を向けてくる女戦士。

「う、うるっしゃい！　だ、だまっれ！　こ、こんなもっの、き、気持ちよくな――んおおっ！　ほひっ！」

敵に対して強気な言葉を返そうとするが、その途端にピストン速度が上がる。一瞬で思考が乱され、魔王は情けない悲鳴を上げることになってしまった。

男はエリシスが想像していた以上に巧みに責め立ててくる。突然激しく膣奥を突いてきたかと思うと、まるで恋人に接するかのように優しく肉壁を擦り上げてきたりもした。カリ首がジュブジュブと媚肉に刺激を与えてくる。

「んっ！　くあっ！　はぁっはぁっ！　う、うごく――なぁっ！　あっあっ！」

柔肉を擦り上げられ、思わず少女魔王は悲鳴を上げてしまう。痛みだけとは違う。どこか甘味を含んだ刺激が全身に走っていた。

ぶにゅぐ。ちゅぶるぅ……。

ただ膣奥に肉先を突き入れてくるだけではない。ゆっくりと円を描くように腰を振ってくる。その上、徐々に胎内の肉棒が大きさを増していた。ただでさえ小さな身体には大きすぎる肉棒が、さらに少女の身を激しく圧迫してくる。

じゅぶっじゅぶっじゅぶっ！

これにエリシスの身体は生理的な反応を催す。膣内から愛液が分泌されていく。

ちょっぱ(ーン)試し読み
ここからスタート!

「おいおいなんだ？　濡れてるのか？　魔王ともあろうものが、犯されて悦んでいるのか？　はは、最低だな」

敏感にこれを察知したカシウスが嘲るような言葉を向けてくる。

「ふ、巫山戯たことをぬか、ぬかっすな！　だ、誰が悦んでなっど――あっあっあっ！」

強気な言葉を返そうとしても、痺れるような刺激によって途中で掻き消されてしまう。

ペニスが硬さと熱気を増していく。

ジュバンジュバンジュバンッ！

「あがっ！　おっおっおっおひっ！　とま、とまっれぇっ！　ひっひっ！　や、やけっる！　余の、余の身体がやけっるぅっ！」

ピストンの摩擦で膣壁が火傷してしまいそうだった。まともに思考することもできない。

エリシスにできたのは、救いを求めるように足先指先を空しく動かすことだけだった。

幼い肉壁が、巨棒を食い千切らんばかりに締め上げる。肉茎に一枚一枚の肉襞が絡みつく。熱棒と火照った少女の柔肉が混じりあい、ペニスが歓喜に震える。

そして――。

「さあ、射精すぞ！　魔王様のマ〇コに俺の子種を流し込んでやるぞ！」

勝ち誇ったように人間が宣言した。

（だ、射精す？　余の膣中の？）

その途端、エリシスの表情は青褪める。確かに人間と魔族とでは種族が違う。だが、それほど両者の間に違いはなく、子供を作ることもできた。
「やだ、駄目だ！　な、膣中は駄目だ！　ぬっけ、そ、それは――ひっひっひっひぃっ！」
じゅずっじゅずっじゅずっ！
だからこれまで以上に激しく身体をバタつかせるが、どうにもならない。悲鳴を上げても敵は喜ぶだけで止まらない。
やがて胎内のペニスが今にも爆発してしまいそうなほどに膨れ上がり、
ぶびゅっ！　ぶびゅぼっ！　どっびゅどっびゅどっびゅどっびゅるるぅ！
「かひっ！　あ……あ――あ――！　で、射精ってる！　余の膣中に熱いのが射精て、射精てるっ！」
膣中に大量の熱液が流し込まれてしまった。
蜜壺を埋め尽くし、子宮内にまで人間の子種が注ぎ込まれる。膣壁、子宮壁に染み込む白濁液。それだけでエリシスの下腹部は熱く疼いた。染み込む子種に女の本能が震える。
「やらっ！　こんな、こんな奴に受精させられるなど嫌だぁっ！」
ヒクヒクッと小柄な肢体が射精を受けて小さく震えた。魔王は勝気な瞳を潤ませながら、何度も首を左右に振る。これに合わせて揺れる一角が空しい。爪を地面に立て、何度も掻

き毟った。その姿は魔族の頂点に立つものなどではなく、年相応の少女のようにしか見えなかった。

深く傷つけられる誇り。ただ、それと同時に下腹部には満足感にも似た生暖かさが広がっていった。女としての本能が、膣内射精に悦びを覚えてしまう。幼い頬が赤く染まり、半開きになった口から艶かしい吐息が漏れる。

「んあ……ぁああ……」

じゅずっ……ぶじゅる……ぶびゅっ……。

やがて、射精を終えたペニスが蜜壺から引き抜かれた。ほんの少し前までは純潔だった生殖器から、流し込まれた白濁液が破瓜の血と混じりあい、ピンク色になりながらドロリと流れ落ちた。

開いた膣口から覗き見える肉襞が、精液に塗れながら艶かしく蠢く。淫猥な柔肉の動きは、少女が女になった証だった。

「はぁはぁはぁ……う、くぅうう……」

少女の口からは荒い息と、悔しそうな呻きが漏れる。手足を拘束していた女達も離れたが、魔王はうつ伏せに地面に倒れ伏したままだった。

「どうだ。自分の立場が分かったか？」

そんな姿に勝ち誇ったようなカシウスの言葉が届く。神経を逆撫でするかのような言葉。

るだけでなく、地面に埋まる魔王に向かって白濁液を振りかけてもきた。
びじゅぶっ！　ぶじゅぶっ！　びちゃびちゃ……。
多量の汚汁が少女魔王の顔を汚す。頬から自然と口端に流れ込む白濁液。エリシスは気づかぬうちにこれを飲んだ。
そしてこの時から、エリシスの食事は男の白濁液に決まったのである。

「んぢゅっ！　んぶっ！　んえぇえぇ……」
精液は耐え難いほどに苦かった。ただ、それでも飲まざるを得ない。土に埋められてから日にちの感覚はなくなってしまっていたけれど、すでに数日が過ぎているのは確実だった。日々犯され続け、体力を消耗していく中では当然腹が減る。いかに魔王といえども、空腹には勝てない。
（きもひよくて、おにゃかがへってりゅんだ。しかちゃないじゃにゃいか……）
何度も言い訳をしながら、少女魔王は人間が通りがかるたびに、
「くらはい。余にしぇーえきくらはい……んあっあっあっ！」
などとおねだりまでするようにまでなってしまっていた。
ちゅくちゅく、んちゅく……ぐちゅるぅ……。
口腔で白濁液を唾液と混ぜ、飲みやすくしてから喉奥へと流し込む。身体中に染み込ん

えっちシーン試し読み
ここからスタート！

でいく汚汁。

「んあああ……」

口からは歓喜の吐息が漏れる。そんな姿に人間達は「まったく仕方ねえなぁ」などといいつつ肉棒を取り出すと、埋められた少女魔王の前にしゃがんだ。丁度口の部分に肉先が突きつけられる形になる。

（ああ、チンポ。チンポォ……）

鼻を突く生臭い臭いに、エリシスはうっとりと笑うと肉棒に舌を伸ばした。

「んちゅっ！　ふちゅっ！　んちゅうぅっ！」

不自由な状態のまま口を開き、肉棒を咥える。窄まる頬。ジュッポジュッポと音を立てながら、人間のペニスを激しく吸いたてた。

するとその動きに合わせるように、土中の触手が少女魔王の膣奥を突き立てる。

「んぶえっ！　ふべっつふべっつふべぇっ！」

口腔の動きとシンクロするような肉紐の動きは、まるで咥える肉棒に突き立てられているかのよう。

じゅずっじゅずっじゅずっ！

（つかれへるっ！　口が、よにょくひがマ〇コになっへるぅ！　ひっひっひっひぃっ！）

最早瞳の焦点は合っていない。意識もほとんど飛んでしまっていた。だが、それでも口

奉仕をやめはしない。舌先で亀頭部を舐め、口唇で肉茎を扱くたび、昂っていく肉体を止めることなど、今のエリシスにはできはしなかった。

「おらっ！　射精るぞ！　お前の大好きな精液が射精るぞっ！　ほらほらっ、しっかり飲めよ！」

舌先でカリ首を絡め取ると、肉棒がビクビクッと何度も震える。その反応に射精が近いことを少女魔王はすぐに察した。瞳がそれだけで蕩けるように落ちる。

「くらはい。んちゅんっちゅっ！　射精ひてっ！　のまへてくらはいっ！　だひてっ、だひっ――んじゅうっ！」

瞬間、食道にまで届きそうなほどにエリシスは肉棒を飲み込んだ。と同時に肉触手も子宮内にまで到達する。

刹那――。

ぶびゅぼっ！　びゅばっびゅばっびゅばっびゅっばぁあああああっ！

「んぼぉぇええっ！　ふごっ！　んもぉっ！　んいっぐ！　ひぶぅううっ！」

白濁液が口腔内に、膣内の触手先端部から汚液が子宮内に多量に撃ち放たれた。一瞬で満たされる口腔。鼻からもビュバッと精液が噴出す。

「んおおおっ！　んぼぉっ！」

クルッと裏返る瞳。ヒクヒクッと唯一自由に動く顔が痙攣するように震えた。首から一

角まで震えるその姿は、まるで壊れてしまったかのよう。いや、実際に少女魔王は壊れてしまっていたのかもしれない。

（ぎもぢいいっ！　口の中臭い汁でいっぱい。マ〇コもいっぱい。きもひいい。あちゅいの。しゅごくからだがあちゅくでぇ……んいっぐぅっ！）

もう何もかもがどうでもよくなっていた。敵である人間の前で鼻から白濁液を垂れ流しながらアクメ顔を晒すことにも抵抗などない。ただ気持ちがいい。感じる愉悦の中に沈んでさえいられればそれでよかった。

そんなエリシスを祝福するかのように、尻から侵入してきた触手が、再び小さな身体を刺し貫く。食道から口腔へとズルズルと肉紐が蠢き進み、やがて口腔からその先端部を現した。

ぶじゅっ！　ずじゅぼっ！　ぶびゅばぁっ！

「んえぇあああっ！　おぼっ！　げぼぉっ！」

折角飲んだ白濁液を吐き出してしまう。顔に胃液交じりの汚汁がべっとりと張りつく。触手の生臭さと相まって、耐え難い臭いだった。だというのに、エリシスは舌を伸ばして吐瀉した白濁液を舐め取っていく。

（もっちゃいない。もっちゃいなひよ）

ぴちゃ。ぷちゅく、ちゅぷるぅ……。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/